

一人ひとりの言語感覚を豊かにする国語科授業のあり方

今井 克彦 荒牧 剛志 益田 俊男

1 国語科が目指す「夢中になって問い続ける生徒」とは

本校国語科では、「夢中になって問い続ける生徒」について、以下の二つの生徒像を想定しました。

- (1) 表現を受け止め、言葉に立ち止まりじっくり考える生徒
- (2) 思いを伝えるために試行錯誤し、「自分の言葉」を創り出す生徒

(1)の「言葉に立ち止まる」とは、生徒が言葉に関心をもち、注目することです。これによって、普段は何気なく目にし、耳にしている言葉のおもしろさを、生徒に実感をもって味わわせたいと思います。

(2)の「『自分の言葉』を創り出す」とは、生徒が言葉にこだわりをもち、表現することです。これを通して、普段は何気なく発している言葉を、生徒に納得のいくまで徹底的に吟味させたいと思います。

(1)(2)の生徒像は、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で理解し表現する資質・能力を、生徒が主体的・意欲的に育てている姿だといえます。

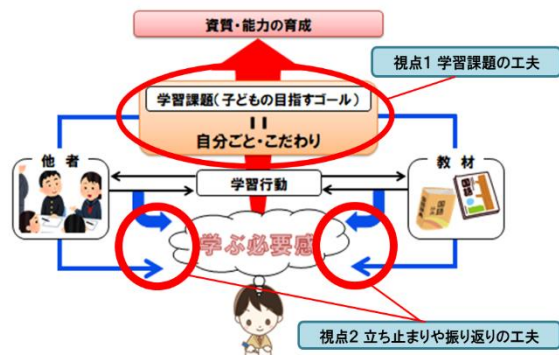
2 「夢中になって問い続ける生徒」を育成するために

上に述べたような「夢中になって問い続ける生徒」を育成するために、本校国語科では「学習課題」と「振り返り」の工夫に努めてきました。

私たちは、「夢中になって問い続ける思考のメカニズム」を資料1のように捉え、学習課題を生徒にとっての目指すゴールと位置づけました。この学習課題は、単元で育成を目指す資質・能力に向かうように工夫する必要があります。また同時に、生徒にとって「自分ごと」となるように

も工夫することで、生徒に「学ぶ必要感」をもたせたいと考えたのです。これにより、学習課題にこだわりをもった生徒は、自分と他者との考え方を比較して考えたり、教材の捉え方を自ら問い直そうとしたりします。ここに、教師が授業のねらいに合わせて、立ち止まりや振り返りの手立てを意図的に組み込むことで、生徒はさらに学ぶ必要感を高め、自ら学びを深めていきます。私たちは、このような思考のメカニズムを繰り返すことが、夢中になって問い続けるためには欠かせないことだと考えました。

また、このような夢中になって問い続ける学びを繰り返していくことこそが、本校国語科のテーマでもある、生徒一人ひとりの言語感覚を豊かにしていくことにつながっていくと考えたのです。



資料1 夢中になって問い続ける思考のメカニズム

(1) 視点1 学習課題の工夫

学習課題を設定する際には、まず、単元で育成を目指す資質・能力を明確にします。次に、教材の特性を捉えます。最後に、これらのことをふまえた言語活動を設定します。このようにして、2年生の「卒業ホームラン」(東京書籍2年)では、学習課題を以下のように設定し、生徒に示しました。

【単元のゴール】 登場人物の言動の意味を考えながら、徹夫の変化が伝わるような「あの日の父親日記」で徹夫の本音を語ろう。そのためには、登場人物の「会話・内言」や「行動描写」と徹夫の変化を関連づけると考えやすい。

① 働かせたい「見方・考え方」を絞る

本単元で付けたい資質・能力は、「人物の言動の意味を読み取ること」です。そのために「会話・内言」や「行動描写」に着目してその意味を考え、それを文章の展開と関連づけて考えるという「見方・考え方」を働かせながら生徒が試行錯誤し、「自分の言葉」を創り出していくことを目指しました。

そこで、設定したのが資料2の日記という言語活動です。その構成を、徹夫の変化と、それに影響を与えた典子と智の言動を書くように、教師が設定しました。これは、生徒に働かせたい「見方・考え方」を絞り、本単元で身につけさせたい資質・能力がワークシートに表れるような工夫の一つです。



資料2 働かせたい「見方・考え方」を絞る言語活動の工夫

② 学習課題を「自分ごと」にする

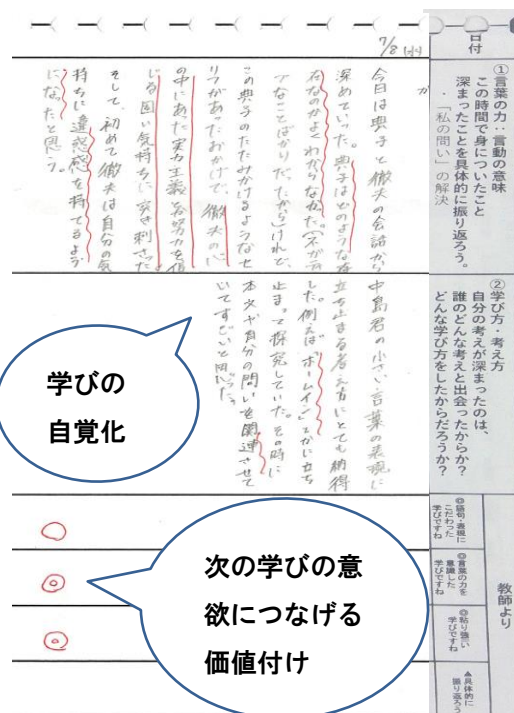
先の学習課題（単元で付けたい資質・能力と言語活動を示したもの）を、授業の最初に生徒に提示したのは、生徒に単元のゴールと授業の見通しをもたせることがねらいです。そのうえで、この学習課題を達成するための問い（「私の問い」）を生徒一人ひとりが立てました。これにより、教科書の物語を、生徒自らが「自分ごと」として読んでいくことをねらいました。

(2) 視点2 立ち止まりや振り返りの工夫

授業においては、生徒が他者や教材の言葉に立ち止まったり、振り返ったりする場面を教師が意図的に設定しました。これは、生徒の学びを、単元で付けたい資質・能力に向かわせるとともに、より夢中になって問い続けたいものにするためです。

例えば、本授業では、教師が「物語の展開に典子はいらないの？」という発問で揺さぶりました。すると、これまで智の言動を中心に読んでいた生徒たちが典子の言動にも着目し始めました。教師の発問により、生徒が自らの文章の捉え方に立ち止まり、もう一度教科書の表現をさらに深く考え始めた一例です。

生徒の振り返りシート(資料3)は、生徒が自らの学びを自覚化できるような観点で振り返らせるとともに、教師が毎時間の学びを◎, ○, △で評価できるように工夫しました。これによって、生徒たちに次の学びの意欲へとつなげてほしいと考えました。



資料3 次の学びの意欲につなげる振り返りシート

<主な参考文献>

- 文部科学省：中学校学習指導要領解説国語編，2018
- 鹿毛雅治「学習意欲の理論 動機付けの心理学」，金子書房，2013
- 鹿毛雅治「授業という営み 子どもとともに『主体的に学ぶ場』を創る」，教育出版，2019
- 奈須正裕『「資質・能力」と学びのメカニズム』，東洋館，2017
- 大滝一登「高校国語 新学習指導要領をふまえた授業づくり 理論編」，明治書院，2018